

疑^わしき歴史を 新^たな視点で検証。 人の自然^な営みとして 史実^を再構築する。

九州大学大学院比較社会文化研究院長

服部 英雄

例えば、元・高麗の軍隊が神風により一夜で消滅。歴史の教科書にも書かれていた元寇の記述は物語としては面白いが、リアリティは乏しい。人の営みとして自然か、という観点で検証し、真実に限りなく近づく「史実」を構築する。たとえ伝説や権威が壊れようとも。

比較社会文化・言語文化研究教育棟の屋上。伊都キャンパス周囲の小高い山の頂には、かつて地方豪族の居城があったという

107

U7 INTERVIEW FILE

U7 INTERVIEW FILE 107の本文は20ページから

服部 英雄

INTRODUCTION

DEAN OF GRADUATE SCHOOL OF SOCIAL AND CULTURAL STUDIES, KYUSHU UNIVERSITY / Hideo Hattori

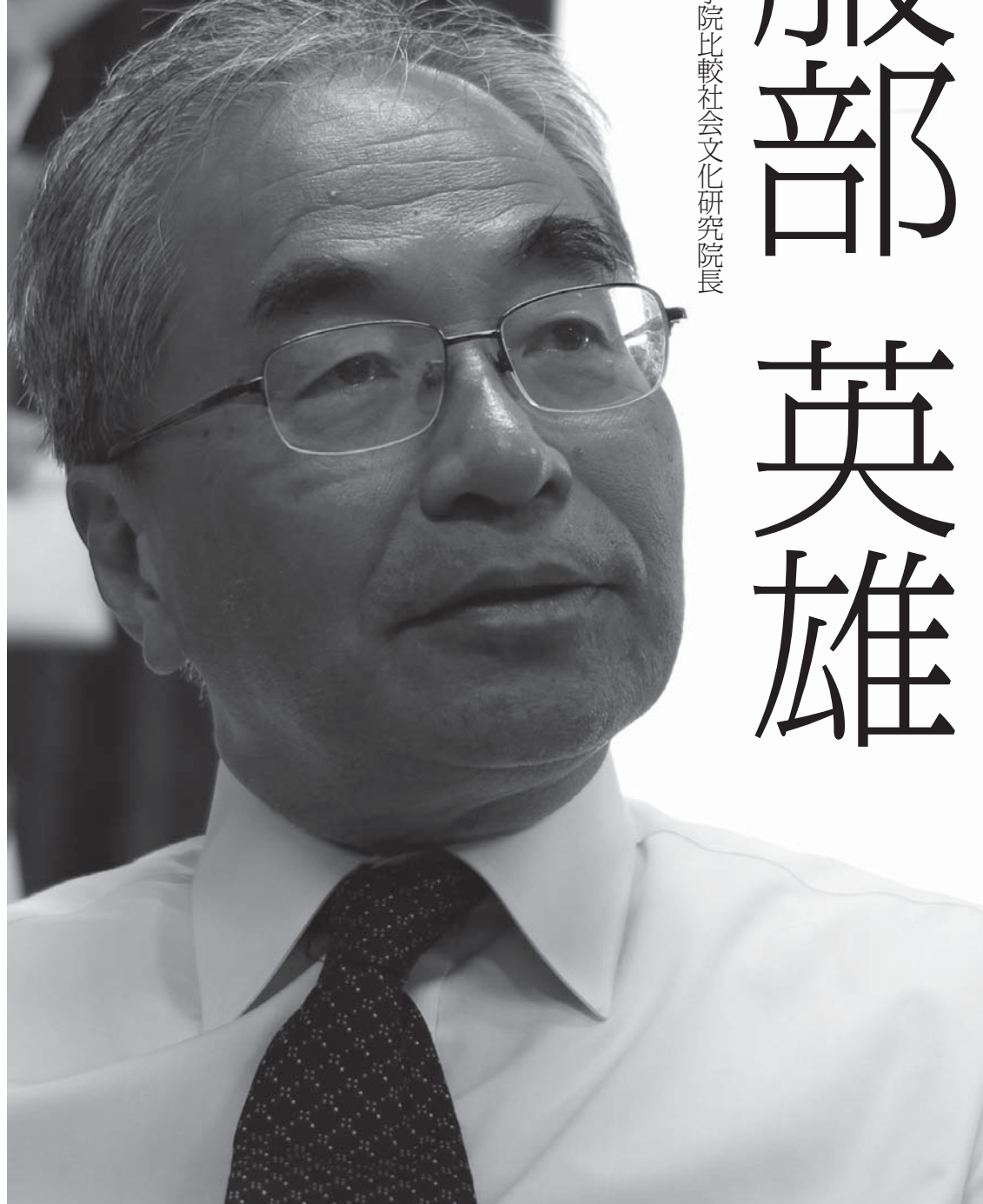
人の営みとして合理的な史実

「多数派ではやることがない」

常識が覆る
痛快感

今、高校で使われている「日本史B」の教科書を一冊手に取り、蒙古襲来(元寇)のページを開いてみた。一二七四年の文永の役については「博多湾に上陸して、集団戦による強力な軍勢力をみせつけたが、わずか1日で引き上げた」と記述されている。七年後の弘安の役の終結は、「暴風によって壊滅的な被害を受けた元軍は撤退した」とあった。そして元軍の敗退にはさまざまな要因があるとしたうえで、「日本には暴風を『神風』と受けとめ、日本は神が守る『神国』であるという考え方が生まれ……」としている。ついでに、中学の歴史教科書を二冊手に取ってみた。どちらも暴風雨により元軍が退却したとあり、うち一冊には神風についても触れていた。

日本の学校で歴史を学んだ人の大半は、蒙古襲来の結末を暴風雨により外敵が撤退したと教わったのではないだろうか。そうした日本人の常識ともいえる歴史の定説に、九州大学大学院比較社会文化学府・研究院の服部英雄学府・研究院長は異説を唱えている。いわく、文永の役において上陸軍がたった一日



で船に戻れはしない。その根拠となっている史料は、八幡神の靈験を記したもので実録ではない。早期撤退は暴風雨により余儀なくされたのではなく、太宰府陥落が困難な時の選択肢だった、など。著書『歴史を読み解く さまざまな史料と視覚』の第一章で展開されるその論は、素人には取っつきにくい史料の引用を斜め読みしても面白く読める。想定読者を「歴史研究者だけではない」とした本書は、ほかにも島原・天草の乱においてキリシタンが原城に籠城した意味を問いつたり、森鷗外が『阿部一族』で書き残した殉死に関する虚実を論じたりした九編を掲載。いずれも常識として固定化した歴史の一説が、新たな視点と確かな根拠で次々に覆され痛快だ。

時代を問わない 人間の共通項

九州大学大学院比較社会文化学府・研究院は、日本と世界の文化の構造や特性を文理融合で研究することを目的とし、一九九四年に設立された。服部さんはその設立に際し、文化庁の調査官から助教授に転身し、九大に籍を移した。

少年時代に自転車を駆って城跡を巡った現地主義は、東大時代に恩師との出会いにより徹底された。文化庁時代も全国の史跡調査に当たり、姫路城や白川郷・五箇山の合掌造り集落を世界文化遺産として申請する際は、国際記念物遺跡会議（ICOMOS）の調査官を現地に引率し、プレゼンテーションを行っている。そうした行政の仕事を通じて培われたのは、人間は不合理ででたらめなことはしないという視点であり、時代や文化の違いによって左右されない人間の共通項への視線だ。文化研究においてそれは、分野を越えた連携を促し、専門の歴史研究においては「不自然な史実」を見つけ出して再検証する原動力となった。

教科書が変わらないように権威や常識の否定には、時間とエネルギーを要する。だが「今は異端」と自嘲しながら、「多数派に安住しない。多数派にいてはやるべきがない」と自説の公表に力を注ぐ。

史実が書きかわったとしても、今日の生活が一変することはない。だが、かつて「神風」を信じ込まされ、片道の燃料で敵艦に向かった若い命があったことを思うと、都合のいい伝説よりも、かつこ悪くても人間として自然な事実を知りたいと思う。

権威を疑う

「学問のフントをぶちまける」

調べなければ 埋もれてしまう

——中学生の頃には城跡巡りをしていたそうですね。城に興味を持ったきっかけは？

夏休みの自由研究で、身近な史跡を調べたことがきっかけですね。生まれ育った名古屋近郊には、中学生が自宅から自転車で行ける身近な所にもかかわらず城がありました。多くは村の領主の館のような規模ですが建物が残っているわけではありませんが、その場に行き周囲を歩いてみると、土塁や堀の一部が残っていて往事を想像できました。高校生になってからは自転車で県外へ。遠くは滋賀県まで野宿用のテントを積んで城跡巡りをしました。

——特に印象に残っている城は？

数多く行ったので、どれか一つは決めきれませんが……。あえて挙げれば、小幡城(名古屋守山区)。小牧・長久手の戦いの時に、家康が籠もっていると聞いた秀吉が攻撃したものの、すでに家康は岡崎に逃げていたという、そういう点で知られている城です。当時を偲



U7 INTERVIEW FILE107 DEAN OF GRADUATE SCHOOL OF SOCIAL AND CULTURAL STUDIES, KYUSHU UNIVERSITY / Hideo Hattori

べる堀跡も土塁も残っていましたが、私が行った後に壊されて今は宅地になっています。そうした消えてしまった城には特別な思いがあります。

——九州大学術情報リポトリジ」としてネット上にアップされている「昭和30年代・濃尾平野と周辺の中世城館」は、中学・高校時代に巡った史跡の記録だそうですね。

地元に残っていない城館も多く、ずいぶん重宝され、『新修名古屋市史』にも引用されました。

——比較社会文化学府・研究院が現在の伊都キャンパスに移転する際は、『青春群像さようなら六本松一九二一福高一九大二〇〇九』として六本松キャンパスの記録を編集しました。

私が九州大学に勤務した最初のキャンパス。これまで文化財行政に依頼されてダム湖に沈み消えていく村の姿を記録してきたのに、消えてなくなる自分たちのキャンパスを記録しないわけにはいけません。編集は志願しました(本書もリポトリジで閲覧可能)。調べ出すと資料や写真が出てくるもの。大学周辺のお店から古い写真もいただきました。調べなければそれらは散在し、埋もれてしまったことでしょう。

史実・史料の外側を考える

——研究者としてのスタートは、中世の荘園研究ですね。著書のタイトルを追うと、「地名」「峠・道」、そして「差別・被差別」がキーワードとして目立ちます。

どれも原点は荘園研究。地名や道も差別の問題も、荘園調査、現地調査からです。被差別部落の起源は、一般には江戸時代に端を発するように言われていますが、調べてみるとずっと古くからありました。また、

差別を受けていても、優れた技能集団であったという側面も見えてきました。彼らの誇りと思います。

——著書『河原ノ者・非人・秀吉』は、被差別部落を経験した人物として秀吉像を再構築し、史料から秀頼が秀吉の実子でないことを示し、毎日出版文化賞を受賞しました。

秀頼が秀吉の子でないことは、世間が言っていたこと。にもかかわらず、学者だけが実子だと言い張っているのはおかしいと調べてみたら、実子ではないことを証明できそうだったのでにまとめてみました。

差別問題は恩師である石井進先生の研究テーマであ



もしれない。しかし、そのことは敵が退却した理由ではない。風上に帆船を進める技術がなかった時代ですから、大陸からの季節風が吹く前に母港に戻るの当初からの計画であつたらうというのが私の論です。

——**そうした新説は、新たに発見された史料を根拠にするのですか。それとも従来の史料の読み方が異なるのでしょうか。**

史実全体の枠組みのとらえ方の違いで、史料の読み直しです。どういう視点で史料を読むか、あるいはその史料がどういう状況で書かれたかを調べてみると、解釈もがらりと変わることがあります。蒙古軍を「神」が一掃したと書き残している『八幡愚童訓』は、八幡神の靈験記であつて、実録として取り扱うべき史料ではありません。

また、長い間ないとされてきた福岡城の天守閣があつたとされたのは、肥後藩細川家の史料に「福岡の天守」と書かれていることが分かったからです。その「天守」がいわゆる天守閣を指している根拠はありません。福岡藩の史料には、矢倉を「小天守」「天守櫓」と呼んでいた記述がありますが、天守台に立つ天守閣が福岡城にあつたと断定できる根拠はない。城にお

U7 INTERVIEW FILE107 DEAN OF GRADUATE SCHOOL OF SOCIAL AND CULTURAL STUDIES, KYUSHU UNIVERSITY / Hideo Hattori

り、それについては亡くなった後に出た本に載っています。秀吉との関わりも石井先生がきっかけ。亡くなる一ヶ月ほど前に自宅におじやました際、「秀吉に興味はないか」と聞かれ、あまりないとお答えしたところ、差別の問題との関連をうかがい、それなら面白そうだと調べ始めた結果です。

——**「蒙古襲来(元寇)」に「神風」は吹かなかった」「島原・天草の乱においてキリシタンが集結した原城は廃城ではなく、籠城も殉死覚悟ではなかった」「福岡城に天守閣はなかった」など、一般論を次々と覆しています。**

史実とされていることの中には、人間の合理的な感覚としてむしろ変だと思わざるを得ないことがあり、本当にそうなのかと調べ直してみると、別の証拠がいろいろ出てくるのです。

例えば蒙古襲来の文永の役では、蒙古・高麗軍が暴風雨により一晩で消え失せたように言われてきました。しかし、気象学の記録では大軍を一掃するような暴風雨が来る季節でないこと、上陸して日本側の騎馬武者と戦っている大勢の兵が短時間で軍船に戻れないことなど、常識的に考えておかしいことが史実とされています。確かに悪天候が蒙古・高麗軍の攻撃を阻んだか

る構造上の常識や遺構、除却の経緯から考えれば、大天守はなかったとするほうが矛盾が生じないのです。

——**城にとって、いわゆる天守閣は不可欠なもの思っていました。**

天守閣は領主の権威の象徴であり、敵に攻め込まれた時に城主が切腹する場。戦乱の世が過ぎた時代に建てられた福岡城にはそれらの必要性も希薄ですし、そもそも天守閣のない城は全国にいくつもありますが、福岡城は国指定の史跡のため安易に復元される心配はありませんが、そうでない全国の城では観光客集めのために天守閣が建てられてしまう。その結果、現代は日本の歴史の中で最も天守閣の数が多いのです。

——**教科書に載っていることでも、疑ってかかれということですね。**

異説を唱えることを目的にしているわけではありませんが、権威を信じるなという基本姿勢はあるかもしれません。過去の先輩方が唱えてきた定説も人間が書いたものですから、間違つたことが含まれていても不思議はない。それでも権威者が言ったことだからと、ずっと信じられてしまっていることがあります。そういうものでも変だと思つたことは検証してみ、最終

的には自分が考えたことを大事にしようと思っ
ています。

——日本史学界では、異端ですか。

今のところはね(笑)。通説に対するアンチは常に異端であり、必ず少数派。一本論文を書いたからといって、すぐには変わっていくものではありません。

——常に多勢に無勢ですね。

通説側・多勢側にいたら、私がやるのがなくなっちゃいますから(笑)。研究者である意味がない。

——そのような研究姿勢は、文化庁で技官を務めた経験と関係しますか。

行政において、現実との緊張関係の中で仕事をしてきた経験は重要かもしれません。特に、不自然なことは信じないという点で。人間がやることは、昔からその時々で合理的な判断をしているもので、そういう突飛なこととはしな思っていますし、そういう視点で歴史を解釈しています。また、もともとそういう性格でもあり、人が書いたものよりも自分で見て調べたことを信じます。そのため現場に行くことも大事です。

島原・大草の乱で原城に籠もった三万とも四万ともいわれている民衆は、本当に死ぬつもりだったのか。

学際組織の社会的使命

——比較社会文化研究院長として、学生に向けて「たこつばに収まるな」というメッセージを送っていますね。

先の蒙古襲来の検証も、もともととは学生の頃聞いたラジオで、気象台の荒川秀俊さんという方が、文永の役は、台風の季節ではないと言ったのを聞いたことがずっと頭に残っていたのです。その後、日清・日露戦争で上陸作戦に参加したある退役軍人の方が、大人数がたった一晩で陸から海に渡れるはずがないと、疑問を語っていたことが大きなヒントになりました。どちらも大学で歴史に取り組んでいた方の言葉ではありませんが、きっかけはどこにでもあります。

大学改革における学際もそういうことだと思います。他分野の学者と組むのも学

DEAN OF GRADUATE SCHOOL OF SOCIAL AND CULTURAL STUDIES, KYUSHU UNIVERSITY / Hideo Hattori

1973年、東京大学文学部国史学科卒業。'76年、同大学大学院人文科学研究科修士課程修了後、東京大学文学部助手に。'78年、文化庁文化財保護部記念物課・文部技官、同庁文化財保護部記念物課・文化財調査官を経て、'94年に九州大学大学院比較社会文化研究科助教授に。'97年同教授を経て、2011年、九州大学大学院比較社会文化学府長・同比較社会文化研究院院長に就任。'96年、東京大学で博士号(文学)取得。専門分野は日本中世史。主な著書に『景観にさぐる 中世変貌する村の姿と荘園史研究』(新人物往來社/'95年/角川源義賞受賞)、『地名の歴史学』(角川叢書/'2000年)、『地名のたのしみ 歩き、み、ふれる歴史学』(角川ソフィア文庫/'03年)、『歴史を読み解く ささまざまな史料と視角』(青史出版/'03年)、『武士と荘園支配』(山川出版社/'04年)、『峠の歴史学 古道をたずねて』(朝日選書/'07年)、『河原ノ者・非人・秀吉』(山川出版社/'12年/毎日出版文化賞受賞)など。出身高校は、愛知県立旭丘高等学校。

九州大学大学院比較社会文化学府・研究院 <http://scs.kyushu-u.ac.jp/>

U7 INTERVIEW FILE107 DEAN OF GRADUATE SCHOOL OF SOCIAL AND CULTURAL STUDIES, KYUSHU UNIVERSITY / Hideo Hattori

文化庁時代に調査で原城跡に立った時に感じたのは、ここは海に囲まれた逃げ場のない城なのではなく、ギリシヤンにとつては海に開かれた城である。そこに籠城した人々はポルトガルから援軍が来て、新しい時代をつくれると信じたのではないかと感じたことがきっかけになりました。

越中富山の戦国大名・佐々成政が、家康のもとに行くために厳冬の北アルプスを越えたとされてきた「立山越え」は、『太閤記』にある「さらさら越え」という記述が立山連峰のザラ峠を越えて黒部川を遡ったという説の根拠です。しかし自分の山登りや冬山の経験から、危険度が高く行程も読めないルートを選択するのはおかしいと思っていました。成政は目的を果たし、早く帰郷したかったのですからね。そこで数年をかけて調べたところ、もつと安全な鎌倉街道には「ザラ」と呼ばれる峠があり、そちらを通ったほうが合理的だと結論づけました。「立山越えの地」であることを観光の目玉としている大町市からは反発がありますが、伝説は伝説であり、史実としてそれを語り継ぐわけにはいきません。そうした不自然さを嫌う感覚は文化庁での仕事でより一層養われたかもしれません。

際ですが、さらに外側に抜け出て、違う視点を持った人の発言からヒントを得たり、考え方を得ることはたくさんあります。若い人には、広い視野を持つて豊かな発想をしてもらいたい。そのため、平成二六年度から学府の名称を地球社会統合科学府とし、改組・創設します。今でも本学府の研究は、三分の一が理系。その体制をより活用するため、名実ともに文理融合の組織であることを明確にしたいと考えています。

——新たな課題ですね。

東日本大震災も、過去の大地震、大津波の歴史が無視された。思い込みやバイアスがかった。これからはなぜ既存の学問・社会が想定できなかったかを考えなければいけない。知っている人は知っていたのに、それが声にならなかったという面もあったでしょう。社会を担う人間の一人として、どういう視点を持って学問に取り組み、その成果を社会に活かしていくかが、本学府・研究院のような学際組織の課題です。